

2001年9月12日、松田高明先生が急逝されました。虚血性心疾患、いわゆる心筋梗塞とのことでした。その報を翌13日に受けた私は、信じられない気持ちで電話を切りましたが、メールでもいくつか連絡が入るに及んで、現実として受け入れざるを得ませんでした。

松田さん（いつものように、そう呼ばせて下さい）とお付き合いをさせていただくようになったのは、私の所属する武蔵工大原子力研究所に姫路工大（当時）から原子炉を使いに来られ、私がFT研究会に参加するようになった1984年頃からでした。

その後、当方の原子炉が稼動しておりました1989年まで、大学共同利用として来所され、さらに本研究会や学会等で年に数回お会いすることができました。その度に、私にとって兄のような存在だった松田さんと、飲み語らうのが楽しみとなっておりました。

本研究会では、1990～92年に会長として重責を果たしていただきました。しかし、松田さんの研究実績と周囲を和ませるお人柄は本研究会にとって得がたいものでしたので、1998～2000年にも再び会長をお願いし、お引き受けいただきました。

その後、1999年3月には、「研究炉の利用に関する専門家会議」（主催 東京工業大学原子炉工学研究所、協力 武蔵工業大学原子力研究所）に本研究会を代表して「フィッション・トラック法の地球科学への応用」と題して講演をお願いしました。この内容は報告書の中に残されておりますので、今でも読むことが可能ですが、私の知る限り、松田さんが書かれた解説の類としては唯一のものではないかと思えます。

そして、2000年11月には、幼少の頃からの夢だった「第42次南極地域観測隊」として「しらせ」に搭乗し、その船上よりメールが届きました。「今日、ロンボク海峡を通り、バリ島を見ながらインド洋へ出る予定です。（中略）210-Pbの件、出発する間際になってもやる予定だった学生が、きちんとした対応を示さなかったので、時間切れを宣言しました。ご心配をおかけしたかもしれませんが、ご容赦ください。」210-Pbの件とは、鍾乳石の形成年代を、共同研究として過剰Pb-210法を適用して求めるというものでした。南極から帰って来られたら取り掛かろうと楽しみにしていたのですが、もはや叶いません。

それから4ヵ月後、帰国の途上にあった2001年3月7日付メールでは、「4月からは姫路工大に帰らず、焼酎と馬刺しのうまい土地に移る予定です。（中略）調査・サンプリングは天候に恵まれ、十二分にやることができました。アーケアンの面白い現象も沢山観察することができました。帰って落ち着いたら、また、飲みながらでも、積もる話をしたいものです。」と伝えて来られました。

文書として最後に拝受したのは、同年4月17日付メールで、「これから、火の島—九州—の中心地、熊本で心機一転、初心に帰って頑張りたいと考えております。

（中略）近くにおいでの際はぜひ御立ち寄りください。焼酎と馬刺しが待っています。」とありました。

最後に松田さんの肉声をお聞きしたのは、亡くなられる2～3週間前の8月下旬、私から昨年のFT

研究会（発表会・総会）の件で、事前にご意見をいただくために電話を差し上げた時でした。まだ、熊本大学での生活は落ち着かず、お忙しい様子でしたが、本研究会の将来に対する危惧と期待を熱く語っておられました。

くり返しになりますが、松田さんは本研究会にとってなくてはならない存在でした。それは先にも述べましたように、研究の先進性ばかりではなく、お人柄としても得がたい存在だったからです。さらに、私個人としては、よき兄貴分として何でも相談できる、稀有なそして特別な存在でありました。

松田さん、私も何時かそちらに行きましたら、果たせなかった約束、おいしい焼酎と馬刺しを楽しみながら、南極での話などぜひ思う存分語り合ひましょう。

それまで、しばらくの間さようなら。

合掌